

親鸞における真仏弟子積の現代的意義

龍谷大学 嵩 満也

親鸞は主著『顕浄を土真実教行証文類』（以下『教行証文類』と略す。）において、他力信心の根拠とその構造について明らかにした後に、「菩提心」、「一念」、「真仏弟子」、「便等弥勒」といった、他力信心をめぐるいくつかの個別のテーマについて言及する。それらは、既に多くの研究者が指摘しているように、師法然が開顕した専修念仏の教えに対する同時代の様々な批判を意識していることは明らかである。たとえば、「菩提心」の問題は明恵の『摧邪輪』における法然批判への応答であり、「一念」の問題は法然門下の念仏の「一念多念」をめぐる論争を背景としており、「便等弥勒」の問題は弥勒信仰に対する阿弥陀仏信仰の弁証とすることが出来る。ただその中であって、「真仏弟子」というテーマは、一見唐突なもののようにも見える。他の問題が教理解釈と直説結びつくものであるのに対して、「真仏弟子」とは教えを実践する仏弟子という歴史的な存在を問題としているからである。

今回与えられた統一テーマは「信仰とは何か―仏弟子ということ―」であるが、仏教の歴史の本質は、仏弟子による教法の実践にある。教法を現実の中で問い続ける営みの中に、仏教は伝統されてきたのである。そこで、発表では、親鸞の真仏弟子積の理解を手がかりに、現代において仏弟子であるということとはどのようなことなのかということについて考えてみたい。

「真仏弟子」についての親鸞の理解で、今回の発表で特に取り上げようと考えている点は以下の内容である。

- 1) 親鸞は「真仏弟子」積で、「真仏弟子と言うは、真の言は偽に對し、仮に對するなり。弟子は釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり」と述べている。この中で仏弟子を、伝統的な理解のように、単に「釈迦」の弟子とするだけでなく「釈迦・諸仏」の弟子とする。このように「諸仏」の弟子でもあるとするとどどのような意味があったと考えられるのか。また、そのことは現代において仏弟子として生きる上でどのような信仰の視座を与えるのか。
- 2) 「仏弟子とは何か」という問は、親鸞だけにみられるものではない。同時代の栄西は、持戒禪定の清浄行者が「真仏子」と言い（『興禪護国論』）、明恵や貞慶は深い釈尊追慕の念とともに仏弟子という自覚を強く持った。親鸞は仏弟子を「金剛の行人」とも呼ぶ。真実信心（金剛心）を具して他力念仏を行ずる者ということである。また、「この信行に由って、必ず大涅槃を超証すべきゆえに、真仏弟子と曰う。」とも述べる。すなわち、必ず大涅槃を証する人が「真仏弟子」とであると理解する。このことは仏弟子を「釈迦」の教えに帰依随順する弟子とする、伝統的な仏弟子の理解とは大きく異なっている。なぜ親鸞はそのように理解するのか。また、そこにみられる仏教観が持つ現代的意義はどこにあるのかについても論じてみたい。

(キーワード) 真仏弟子、諸仏、金剛の行人、現代的意義